

14 ネパール社会の人々が考える死生観・健康観の実態調査

○湯舟 貞子, 井田 歩美, 吉永 雅美 (関西福祉大学看護学部)

I. はじめに

数年前、始めて訪れたネパールカトマンズでの光景を忘れることのできない思い出となっている。日本で生まれ、日本社会の中で育ってきた者にとって人の死というものがこのように観光客を含む大衆の目の届く中で、家族・親族に取り囲まれながらその生命を閉じていく。そしてその死後、死者を大衆の目の届く中で薪を積み上げた立ち木の上に載せられ、焼かれていく、焼かれた死体は川に流され、死体の流された川の傍では女性や子ども達が髪の毛や身体を洗っているのである。そこで今回の調査、死観尺度を使ってネパール人社会の人々が考える死生観について、また健康観について報告する。

II. 研究方法

1. 対象と期間

1) 民族別特徴: ○Adibashi Janjati ○Dalit ○Brahmin

2) 期間: 2008年12月にアンケートを依頼。2009年9月回収。

2. 倫理的配慮: ネパール医科大学倫理委員会の承認を得る。

3. 分析方法: 統計ソフト SPSS15.0J を使用し、記述統計、t 検定をおこなう。

III. 結果

調査対象者はネパール国カトマンズに在住する10代～80代の男女788名。

死観尺度は、死に対する総体的態度構造(死観; death perspectives)を明らかにする尺度であり、スピルカら(1977)が開発した尺度を金児(1994)が邦訳したものである。スピルカは大学生とその親に回答を求めた結果、どちらの場合でも6因子(浄福な来世、挫折と別離、苦しみと孤独、人生の試練、未知、虚無)が抽出された。

IV. 結論

人間が避けられない死に直面して、生と死の意味を問わざるをえなくとき、各人は自己の死生観によって生と死を意味づけている。自己と最も親密で、身近な共同体は家族であり親しい友人である。“死”に対し、つらく寂しいことであり、不幸な出来事であるの結果からも、生き残る者と死に往く者とが、お互いにかげがえのない存在者として共に語り、共に過ごす時間を必要とする。家族の一員としての役割と責任を十分に果たしてきたという実感、家業や事業を引き継ぐ後継者がいるという安心感、残された者が自分の思いと願いを受けとめてくれるだろうという安堵感等が、死に往く者にとって救いとなる。

伝統的には、日本を含め東洋では自然は生命的自然であり、精霊に充ちた自然であった。しかし現代の高度資本主義社会は、物質的な価値を重視し、便利で豊かな生活を追及してきた社会である。人間は生物として生きている限り意味を持ち、死ねば無となるといった考えが支配的であったが、家族の存在の意義は大きく、人間にとって生きた人間の愛こそが、不安や孤独を癒し慰めるのである。これらの意識をカースト別に、また性別・年齢別に比較を加えた。